

# 全国盲ろう教育研究会 会報 第17号

2019. 4月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

桜の花が咲き誇っている所、清涼な朝に小鳥の囀りがきこえる所、草木の新芽の香りが漂っている所、まだ暖房器具が離せない所・・・様々な場所で、新年度を迎えられたことと思います。今年度から大きく環境が変化した方もいらっしゃると思います。

当研究会に集ってくださる皆様お一人お一人に、少しでも有益な情報を提供していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## ●全国盲ろう教育研究会第16回研究協議会・定期総会報告

2018年8月4日(土)・5日(日)、全国盲ろう教育研究会第16回研究協議会を国立特別支援教育総合研究所にて開催しました。久里浜の海を眺めながらの研究協議会に全国から100名ほどの方が参加くださいました。盲ろうの子どもたち、ボランティアさんを含めると約140名程の方々にお集まりいただきました。



挨拶いただいた、国立特別支援教育総合研究所 宍戸理事長

今回の研究協議会実施にあたりましては、前回に引き続き、国立特別支援教育総合研究所と筑波大学附属久里浜特別支援学校のご支援、ご協力をいただき、快適な環境の中で研究協議会が実施でき、盲ろう児者のプログラムも進められましたことに感謝いたします。また、盲ろう児者の活動プログラムの実施にあたりましては、多くのボランティアの方々にご協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

以下のようなプログラムで実施しました。

【1日目 8月4日（土）】

○開会式

○実践報告

「5年間の幼児期の活動を振り返って  
～「ねえ、先生」が届いた日～」

鹿児島県立鹿児島盲学校教諭 上峯 忍 氏

○ポスターセッション

【2日目 8月5日（日）】

○海外研修報告

「パーキンス盲学校での盲ろう教育」

全国盲ろう者協会職員 亀井 笑 氏

○分科会（以下の4グループに分かれ、実施）

①卒業後の生活・就労

②コミュニケーションについて Aグループ（教職員・支援者等対象）

③コミュニケーションについて Bグループ（保護者対象）

④映画「もうろうをいきる」を観る

○分科会の報告

○閉会式

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

事務局の責任において概要をまとめさせていただきました。



## ●第16回定期総会報告 【8月5日 9:00~9:30】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

### ・議案1 2017年度事業報告

以下の通り、提案がなされました。

1. 運営委員会を4回開催し、運営基盤の整備を図った。
2. 全国盲ろう教育研究会総会および研究協議会の報告を会報に掲載・配布したが、研究会のリーフレットの作成には至らなかった。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、情報提供を行った。
4. 全国盲ろう教育研究会第15回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上及び情報交換を図るとともに、第16回研究協議会の準備を進めた。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」を発行し教育研究の向上に寄与した。
6. Webサイトの内容の充実を図ったが、十分な情報提供には至らなかった。
7. 東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図った。
8. 盲ろう児と家族の会ふうわ、CHARGEの会、東京都盲ろう者支援センターと共催で、「家族の交流の広場」を2回開催し、意見・情報交換の場を設けた。

○原案通り、了承されました。

・議案2 2017年度会計報告

以下の通り、提案がなされました。

【2017年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】

\* 単位は円

項目	2017年度予算	2017年度決算	備考
前年度繰越	413,986	413,986	
年会費 (2,000円×130名)	260,000	214,000	2018年3月31日現在 会員数132名 納入者88名(複数年度分の納入を含む)
ご寄付	—	8,090	
利息	—	5	
合計	673,986	636,081	

【支出の部】

\* 単位は円

項目	2017年度予算	2017年度決算	備考
定期総会報告書発送費	40,000	0	発行の遅延により2018年度の送付となった。会報第16号及び定期総会報告を2018年5月発行した。
会報第16号発送費	40,000		
第15回研究協議会案内発送費	40,000	40,140	
研究紀要第12号発行費	200,000	181,117	
研究紀要第12号発送費	80,000	67,295	
リーフレット発行費	50,000	0	
リーフレット発送費	40,000	0	
Webサイト維持費	35,000	22,248	
事務費	60,000	48,896	
会議費	60,000	19,210	第100回～第103回運営委員会開催の交通費実費(第102回を除く)
予備費	28,986	0	
合計	673,986	378,906	

残金 257,175円【収入636,081円－支出378,906円】は次年度に繰り越します。

【第15回全国盲ろう教育研究会研究協議会会計報告】

【収入の部】

\*単位は円

項目	金額	備考
参加費	278,000	会員(3,000円)×38名、非会員(4,000円)×41名
宿泊費	122,280	宿泊棟使用料、朝食、昼食、宿泊雑費を含む
懇親会費	180,000	3,000円×60名(宿泊者・非宿泊者含む)
第14回繰越金	291,698	
合計	871,978	

【支出の部】

\*単位は円

項目	金額	備考
事務費	29,082	
宿泊費	122,280	
懇親会費	180,000	
情報保障費	226,954	全体手話通訳費用、ボランティア交通費等含む
講師謝金・交通費	59,100	
雑費	24,544	
合計	641,960	

残金 230,018 円【収入 871,978 円－支出 641,960 円】は、今後の研究協議会での運営費として使用します。

○原案通り、了承されました。

・議案3 2018年度事業計画

以下の通り、提案がなされました。

1. 定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。
2. 全国盲ろう教育研究会第16回研究協議会の報告を配布するとともに、研究会のリーフレットを作成・配布し、盲ろう教育に関する情報発信に努める。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。
4. 全国盲ろう教育研究会第16回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第17回研究協議会の準備を進める。
5. 「盲ろう教育研究紀要第13号」の編集作業を行う。
6. Webサイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。
7. 東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図る。
8. 関係する機関と連携しながら、「家族の交流の広場」を開催し、意見・情報交換の場を設ける。

○原案通り、了承されました。

・議案4 2018年度予算

以下の通り、提案がなされました。

【2018年度国盲ろう教育研究会予算案】

【収入の部】

\* 単位は円

項目	金額
前年度繰越	257,175
年会費 (2,000円×130名)	260,000
合計	517,175

【支出の部】

\* 単位は円

項目	金額
定期総会報告書発送費	50,000
会報発送費	50,000
第16回研究協議会案内発送費	50,000
リーフレット発行費	100,000
リーフレット発送費	50,000
Webサイト維持費	35,000
事務費	80,000
会議費	60,000
予備費	42,175
合計	517,175

○原案通り、了承されました。

## ●全国盲ろう教育研究会 第16回研究協議会報告

### 実践報告

【8月4日】13:45～15:45

#### 「5年間の幼児期の活動を振り返って ～「ねえ、先生」が届いた日～」

鹿児島県立鹿児島盲学校教諭 上峯 忍 氏

鹿児島盲学校の乳幼児教育相談において行ったAさんとの活動について、コミュニケーション面の成長を中心に報告します。



#### 1 はじめに

##### (1) 出会い

平成25年7月初旬、鹿児島聾学校から連絡があり、「視覚障害のある、1歳のお子さん（Aさん）がいる」ことを知りました。後日、聾学校へ行ってAさんと対面することができました。視覚と聴覚に障害のある子に会うのは初めてのことでした。

聾学校で出会ったときの様子は、以下の通りです。

- 光覚がある。両耳ともに、およそ80dB（感音性難聴）
- マラカスの音や、太鼓の音・振動に気付き、手を伸ばす。聴覚の活用が図れそう。
- 自分の足にマラカスなどが触れていると手探りをして取るができる。触れていないと、探さずにいたり、泣き出したりする様子がある。手が楽に届く範囲で周囲を理解している印象
- 「うつ伏せ→仰向け→うつ伏せ。」横に転がるのではなく、その場で寝返りを繰り返す。
- 高ばいの姿勢になり、その場で円を描くようにクルクルと回る。
- 大人の体と密着していたり、向かい合って抱っこをしたりする（正面に人や遊ぶ物などの対象がある）と安心しやすい。

##### (2) 教育相談（Aさんの活動）の進め方の検討

###### ア 相談体制などについて

聾学校での対面を経て、盲学校でも教育相談を行うことになりました。

種子島在住のAさんは、病院への通院のため、2か月に1回、鹿児島市内にやってきます。その機会に教育相談を行うことにしました。高速船を利用して、3時間以上かけて来校します。来校の際は、盲学校と聾学校での教育相談、病院での診察を2日に渡って行うこと（ハードスケジュール！）が多くなりました。

## イ 活動の内容について

自分の知る範囲では、鹿児島盲学校で視覚と聴覚の重複障害児の指導事例はなく、活動内容を検討するにも手掛かりのない状態でした。お母さんや聾学校の先生方からの情報、初対面時の様子、同じ眼疾患のある盲学校児童の指導例などから活動内容を考えていきました。

盲学校での1回目の活動に向けて感じていたことは、次のようなことだったと記憶しています。

- そもそも「どんなことを目的として活動を計画すればよいのか・・・。」なかなか方向性を見いだせない。他の乳幼児さんたちのように視覚面への働き掛けを通して活動することが大切なのだろう（このときは「大切なはず」としか考えられなかった）。
- 聾学校の先生の願い：補聴器の使用に慣れて、自分の声やお母さんを初めとした家族の声に触れてほしい。その繰り返しの経験を通して声や音への関心を高め、周囲とコミュニケーション（身振りや音声模倣）する力を築いてほしい。
- 毎日会って活動できるわけではない（2か月に1回）。日々の生活を通して成長した様子を感じることはできるだろう。では、盲学校でAさんの成長につながる活動はできるのだろうか。
- とにかく、「Aさんをよく知る」ことから始めよう。

## ウ 情報の収集

### ○ 校内の係での話し合い

聴覚障害に関することを調べたり、聾学校で勤務経験のある本校職員に尋ねたりしました。聴覚に関する理解をして、視覚面からのアプローチを可能にしたいと考えていました。

- ・ 聾学校で勤務経験のある職員からの情報
- ・ 「聴覚障害児教育の基礎知識」DVD（大塚クラブ）視聴
- ・ 初めは「盲ろう」という理解はできていない。

### ○ インターネットからの情報

- ・ 特総研ホームページ内「障害のある子どもの教育の広場」
- ・ 特総研ホームページ内「報告書・資料」「専門研究／調査研究／課題研究／一般研究報告書」

## 2 活動の概要

### (1) 各年齢での活動の主な様子

#### ア 2歳

##### ○ 活動の方針

文献等を通して得た情報や、聾学校の先生方の願い（前述）などから、

コミュニケーション面への取組が大切なことが分かってきました。その時点で具体的な取組は始まっていない状態だったので、Aさんが「どんな受信の仕方をしているか」、「どんな発信の仕方をしているか」をお母さんと共有したいと考えました。

○ 活動時の様子（活動時間：約60分）

- ・ 盲学校に到着したときに眠っていることが多い。
- ・ 自分の意思と違うときや不快感などがあるときに泣いたり、のけぞったりできる。
- ・ おんぶや抱っこで体を密着させて活動（わらべ歌）することなどを楽しむ様子があった。
- ・ 強い光に気付く。光に気付いて手を伸ばすことは少ないが、音に気付くと手を伸ばして探る。

Aさんは、こちらが提案する遊びをお母さんや教師と一緒に慎重にしている印象でした。初めから激しく泣くようなことはなく、比較的穏やかに活動していました。途中で眠ってしまうときもありました。

イ 3歳

○ 活動の方針

体を揺らす遊びが好きなことが分かってきたので、ブランケットを使った揺れ遊びを中心に活動を進め、それらの活動を通してAさんからの発信や受信がないかを観察しました。8月に盲ろう研究会に参加して「盲ろう」という捉え方を知り、ネームサイン等も使用するようになりました。この頃は、「周囲（物や人）への関心をもってほしい。それを徐々に広げられないか・・・」と考えていました。

○ 活動時の様子（活動時間：約80分）

- ・ 盲学校に到着したときに眠っていることが多い。
- ・ 快と不快を行き来する（すばやく行き来するイメージ）。不快なときに激しく泣く。
- ・ ボイスレコーダー（以下、VR）を持っていたい。聞いていたい。
- ・ 揺れ遊びが中断されると、頭を左右に振ることができる。

好きな揺れ遊びが中断したとき、仰向けの姿勢のまま横揺れを再現するかのように頭を左右に振るようになりました。「まだしたいね」、「面白いね」と再開の発信として受け止めてフィードバックし、揺れ遊びを繰り返し楽しみました。

好きな活動で明るい笑顔があり、活動をしたくないときなどには激しく

泣くことが増えました。主張がはっきりしてきました。VRに録音してある音楽を聞くことに夢中で、いつも左耳で聞いていたい様子でした。持っているとは安心で、手放すと不安や怒りがあるようでした。

#### ウ 4歳

##### ○ 活動の方針

(3歳時のものに加えて)VRで音楽を聞くことに固執しないで済むように、片付けたら好きな揺れ遊びなどを始めることにしました。手放してもVRはなくなることを伝えるために、一緒にカゴに片付けるようにしました。

##### ○ 活動時の様子(活動時間:約90分)

- ・ 盲学校に到着したときに穏やかな様子が増えていく。
- ・ 座位が徐々に安定し、相手の顔をじっくり触る様子がある。
- ・ VRを手放しても平気になってきた。
- ・ 表情がより豊かになってきている。

4歳後半になると、体力が付いてきたのか、2時間以上の移動にも関わらず、穏やかな表情で来校する姿が見られました。そして、向き合って座る担当者の顔を執拗に探ることが始まりました。

VRを持たないときは「何か楽しい遊びがある」と期待しているのか、片付けに比較的スムーズに応じる様子がありました。また、VRが欲しいときなどに左耳をトントンたたく身振りが始まりました。この身振りは、他にもいくつか意味をもっているかもしれません。

揺れ遊びでは、中断したときに仰向けで腰を上下に動かす動作がありました。これも再開の発信と理解してフィードバックしました。

顔をくしゃくしゃにして笑うか、激しく泣くかといった姿を見せがちでしたが、すました表情や微笑もよく見られるようになりました。

#### エ 5歳

##### ○ 活動の方針

トランポリンとブランケットでの揺れ遊びを柱にしてAさんの発信を引き出して、やりとりをしながら、できるだけじっくり活動することにしました。

##### ○ 活動時の様子(活動時間:約90分)

- ・ 移動の疲れをあまり見せず、穏やかな表情で活動を始める。
- ・ 活動中はVRにとらわれない。

到着して、すぐにでも活動を始められそうな様子(余裕)が出てきまし

た。手拍子遊びでは、速さや強弱の変化を楽しみ、手を止めるとすかさず担当の手を握り、「再開」を求めてきました。

活動中に泣くときがありましたが、激しい泣き方ではなく、訴えるような泣き方でした。ブランケットの揺れ遊びでは、中断したときにブランケットの両縁を握って、自分に被せるような動作がありました。加えて、左耳をトントンする身振りもありました。「VRか？」と思いましたが、大好きなブランケットを楽しんでいる最中だったため、揺れの再開として応答しました。笑顔でした。

## オ 6歳

### ○ 活動の方針

6歳になる直前の活動を星先生・雷坂先生が参観され、助言をいただきました。基本的には5歳時の方針の継続ですが、柱とする活動に焦点を絞って取り組むことで、身振り等を生かしてやりとりする楽しさを味わえるようにしたいと考えました。

### ○ 活動時の様子（活動時間：約90分）

- ・ 動きの再現より、相手の手を取って直接伝えようとする様子がある。
- ・ 自分の感じた楽しさの確認（体の動きなど）に終始しない（相手の存在を感じている）。

（仰向けで）揺れ遊びで使うブランケットに気付くと、自分でお尻をずらして乗ることができました。具体物と活動が結び付いていることを教えてくれました（継続観察）。

トランポリンの揺れ遊びでは、担当の手や足を探って活動の再開を伝えるときがありました。ブランケットの揺れ遊びでは、自分で両手をパチンと合わせたり、担当の手を探ったりしていました。以前していた、頭を横に振るなどの身振りは少なくなり、相手の手などを探って伝える様子が増えてきました。

## (2) 場の設定について

### ○ 活動1～5回目

できるだけ整然として、広く安全に活動できるようにする。また、明暗をつけて少しでも視覚的な気付きを得やすくすること。

道具の配置はほぼ固定していましたが、場の間隔を広くしてダイナミックな活動に対応できるようにしていました。

### ○ 活動6回目以降

活動空間をAさんが把握しやすいように、できるだけコンパクトな空間にする。よく使用する教具の位置を同じにする。

家庭では、寝返りをして自分の好きなおもちゃなどを探る様子がありました。2か月に1度のペースが基本ですが、場を小さくして少しでも空間の把握がしやすいようにしたいと考えました。

活動空間の中を寝返りなどで移動する様子はありませんでした。揺れ遊びをするため、下のような場にしましたが、Aさんの両手幅程度の設定でもよかったのかもしれない。



### (3) 関係機関等との連携について

2歳の頃の関係機関が、1年ごとに徐々に増えていきました。地元の中種子養護学校の先生方の御尽力があり、関係者が支援者会議などで直接お話しする機会もできました。

#### ア 2歳

鹿児島聾学校（電話・メール：定期相談）・中種子養護学校（電話・メール）

鹿大附属病院・種子島の病院・中種子町保健センター（電話）

#### イ 3歳

盲ろう教育研究会への参加

中澤先生・星先生による教育相談（種子島で実施）

鹿児島盲学校での活動の報告開始（メール：病院を除く）

#### ウ 4歳

中種子養護（教育相談会：不定期）

支援者会議1（中種子町保健センターで実施：中種子養護・発達支援事業所の方・中澤先生・星先生ほか）

#### エ 5歳

中種子養護（定期相談開始）

B事業所（週1回の利用：母子通園から）

盲ろう幼児担当教員研修会（中種子養護・B事業所・鹿児島聾・鹿児島盲から参加）

才 6歳

巡回相談（鹿児島盲で実施 特総研：星先生・雷坂先生）

支援者会議2（中種子養護で実施 B事業所・鹿児島盲・鹿児島聾・特総研：星先生・加藤先生）

### 3 Aさんとの5年間（平成25年7月～平成30年3月）の活動の考察

#### (1) コミュニケーションに関することについて

3歳からネームサインを決めてAさんと活動してきました。それでも、2か月に1度のペースの活動ということもあって、担当のことや、盲学校で活動していることを理解できているかが心配で、不安がなかなか拭えませんでした。ですが、4歳頃からはトランポリンやブランケットでの馴染みの活動で担当とやりとりするAさんの豊かな表情が支えになり、徐々にその不安は解消されました。

そして、この時期から相手の顔を探るようになりました。ネームサインだけでなく、関わる人をより詳しく知る大切な営みだったと思います。

また、就学前に行った2回目の支援者会議で、B事業所の方が、Aさんといつもしているくすぐり遊びをする場面がありました。そのとき、「くすぐり方にも人それぞれ特徴があるのだなあ」と感じました。そのことから、Aさんと、関わる人との間には何かしらの楽しさを分かち合える馴染みの活動があって、Aさんはそのときの相手から得る情報（相手の体の感触、香り、ネームサインなど）も加味して、相手を理解しているのではないかと思うようになりました。

ともに楽しむ活動を経て、Aさんは相手を理解しているのではないかと考えます。

受信では、くすぐり遊びで脇をくすぐられることを期待する様子や、ブランケットに触れたときに表情が和らぐことなどから、手に触れるなどの身体接触を基本とした力が付いてきたと感じています。また、直前に触れたオモチャを記憶して、二つの対象から選択する様子も見られました（継続観察）。オブジェクトキューに触れて活動を理解することにもつながると思います。

発信では、3歳頃から、ブランケット遊びの中断時に頭を左右に振るなどして、活動中の動きを自分で再現する姿がありました。担当がその意図をくんで対応（遊びの再開）していました。それが、教師の手を探ったり、手に気付いたときに自分の手を合わせたりする姿に変わっていきました。遊びを一緒にしている相手の存在に気づき、自ら関わろうとする姿だと感じています。

また、Aさんは手拍子遊びが好きでした。相手と直接手を介して遊ぶこと

が好きだったことも、手を使ったやりとりを気付きやすくしたのではないかと考えています。

活動中に見せる姿勢が、徐々に【仰向け（0～6歳）・支座位ができる（3～4歳）・座位ができる（4歳～）・つかまり立ちができる（5歳～）】と変わっていきました。

大まかではありますが、姿勢の変化に合わせてるように、Aさんの発信と周囲の環境にも変化があるようです。関わる人と場所が増え、心がくすぐられる経験が増えたことも、Aさんの体の成長を後押ししていると思います。

年齢	活動中の姿勢	主な出来事
0～6歳	仰向け	揺れが止むと頭を左右に振る（発信：こうして揺れたよ。楽しかった。〈3歳〉）
3・4歳～	支座位ができる 座位ができる	左耳トントンの身振り（発信：VR等） 中種子養護学校での不定期相談開始
5歳～	つかまり立ちができる	B事業所の利用開始 中種子養護学校での定期相談開始
6歳～	自分の力で立つことができる	相手の手などを探る（発信：もう1回）

## (2) 支援者間の連携について

活動の様子は、可能な範囲で互いにメールを活用して報告し合いました。それぞれの場所での活動の様子を知ることは、以下の点で互いに有意義だったと感じています。

楽しんでいる活動の把握 発信（身振り等）や受信の様子 活動の精選の意義  
Aさんの発信に対するフィードバックの確認 サポートブックの作成 など

出会った頃は、Aさんの支援の輪は小さい状態でした。保護者の方や、中種子養護学校の先生方の御尽力により、地域での支援の輪が広がっていきました。

Aさんが3歳の頃に、「仰向けで探索する姿から、座位などに自分で姿勢をかえて探索する姿が変わってほしい」と感じていたことを思い出します。

座位が安定してきて、つかまり立ちをしたり、自分で立ったりする様子を見ると、周囲への関心の拡大の鍵になっていたのは、好きなオモチャなどの「物」と言うよりは、拠点となる「人」の存在ではなかったかと思います。Aさんの場合、人との関わりを通して、周囲の物や人への関心をもったり、高めたりすることが可能になって、今その範囲を徐々に広げているところな

のだと思います。

(3) これから楽しみなこと

- 事業所の利用や中種子養護学校での定期相談など、地域の活動の場で支援者との関係ができました。学校生活がスタートし、家庭を出て活動する機会がグッと増えました。これまで築いてきたやりとりの力を一つ一つじっくりと高めてほしいです。
- 食事のように、日々の、身近で、楽しみにできることから、オブジェクトキューと実際の活動の結び付きについて理解し、生活の見通しをもてるようになってほしいです。そして、見通しをもつことで、期待感をもって楽しんで生活してほしいです。

4 おわりに

ブランケットの揺れ遊びを中断したとき、笑顔で頭を左右に振るAさんの様子を初めて目の当たりにした日がありました。とっさに「揺れるの楽しいね!」「もっとしたいね!」と言葉を掛けたときの興奮を覚えています。自分自身が目の前の出来事を「楽しい」と感じていました。「Aさんの動きをくみとって言葉を掛けた」というよりは、ごく自然に言葉が出て、「もう1回しようね(しようか)」「もっとだね。分かったよ」という遊びの再開につながっていきました。そして、頭を振る身振りを「揺れ遊びの再開のサイン」として理解し、「先生、楽しいよ。まだしようよ」というAさんの思いも十分に感じとっていました。

それからしばらく時間がたって、相手の手などに触れて再開を求める様子を目にするようになりました。手拍子で遊ぶときに、手に触れて遊びの再開を求められることには慣れていたので、ブランケット遊びで手などに触れてきたことに対しては、特に大きな驚きはありませんでした。

ですが、横揺れや縦揺れの様子を自分で再現する身振りに留まらず、人の手などを探して働き掛ける様子を改めて考えたとき、明確に相手に働き掛けている事実気付きました。

頭を振るサインは、その時点では自分の中で完結していた「楽しい」だったかもしれませんが、それが、相手にも「楽しい」を届ける姿に変わってきました。より多くの人に伝わる「ねえ、先生」になってきました。それは、これまでの家庭や地域の活動の場、盲学校、聾学校などで人と触れ合う中で培われた力だと思います。

これからも、人と触れ合うことを通して学習や生活の楽しさを味わってほしいです。そして、好きな物や楽しいことが増えるだけでなく、周囲の人とそれを共有して「ねえねえ」と呼び掛けたり、「楽しかったね」と分かち合える関係を築いたりしてほしいと願っています。

## ポスターセッション

以下、6本のポスターの発表がありました。全体の場でポスターの概要を説明後、興味関心のあるポスターのところに移動し、活発なやりとりが行われました。発表いただいた方々に感謝申し上げます。

※ ポスター発表の内容については、「研究紀要」に投稿を依頼したいと考えております。

### ① 地域活動1年を経て

徳島県立徳島視覚支援学校 長尾 公美子 氏

### ② 2019 ふうわの集い in とっとり

鳥取県盲ろう者支援センター 世川 桃子 氏



### ③ 盲ろう合宿に参加したMさん

鎌倉市立第一小学校教諭 山内 美智子 氏

### ④ 先天盲ろう児教育資料の電子化保管

筑波技術大学 岡本 明 氏

### ⑤ 大学の海外(米国東部)研修に参加して

筑波技術大学大学技術科学研究科情報アクセシビリティ専攻  
森 敦史 氏

### ⑥ 国立特別支援教育総合研究所の盲ろう教育に関する取組

国立特別支援教育総合研究所 星 祐子 氏

## 「パーキンス盲学校での盲ろう教育」

全国盲ろう者協会職員 亀井 笑 氏

昨年（2017年）9月から今年5月までの9ヶ月間、米国マサチューセッツ州にあるパーキンス盲学校で受けた研修報告をさせていただきます。

同校は、米国で初めて公教育を受けた盲ろう者であるローラ・ブリッジマンやアン・サリバン、ヘレン・ケラーが学んだ学校で、視覚障害プログラム、盲ろうプログラム（Deafblind Program）があります。また、海外の視覚障害児、盲ろう児、重複障害児支援を行っているパーキンス・インターナショナル（Perkins International）は、海外の教育関係者向け養成プログラム、エデュケーション・リーダーシップ・プログラム（ELP）を提供しています。ELP研修では、世界各国からの参加生がパーキンスのキャンパスにて、講義、授業観察、実習、また地域の学校・施設訪問を通して、上記の障害児教育についての専門性を高めます。



9ヶ月の研修では、盲ろうの子どもたちの多様性、抱えている困難について理解を深めると共に、個々のニーズに対する支援を多面的に考えていくことの重要性を学びました。コミュニケーションに重点を置いたパーキンス盲学校の盲ろう児への教育については、クラスルームや寄宿舍での盲ろうの子どもたちとの関わりから学んだことが何よりも大きく、どのように子どもたちと目の前の出来事や互いの感情を共有するか、また子どもたちにとっての意味あるコミュニケーションとは何かということについて常に考えさせられ、子どもたちから教わる機会が多くありました。

12カ国から参加していた同期生からは、文化やバックグラウンド、障害児、盲ろう児が置かれている状況が違うなかで、障害をもった子どもたちを支援していく理念について、議論し合う機会があり様々な刺激を受けました。

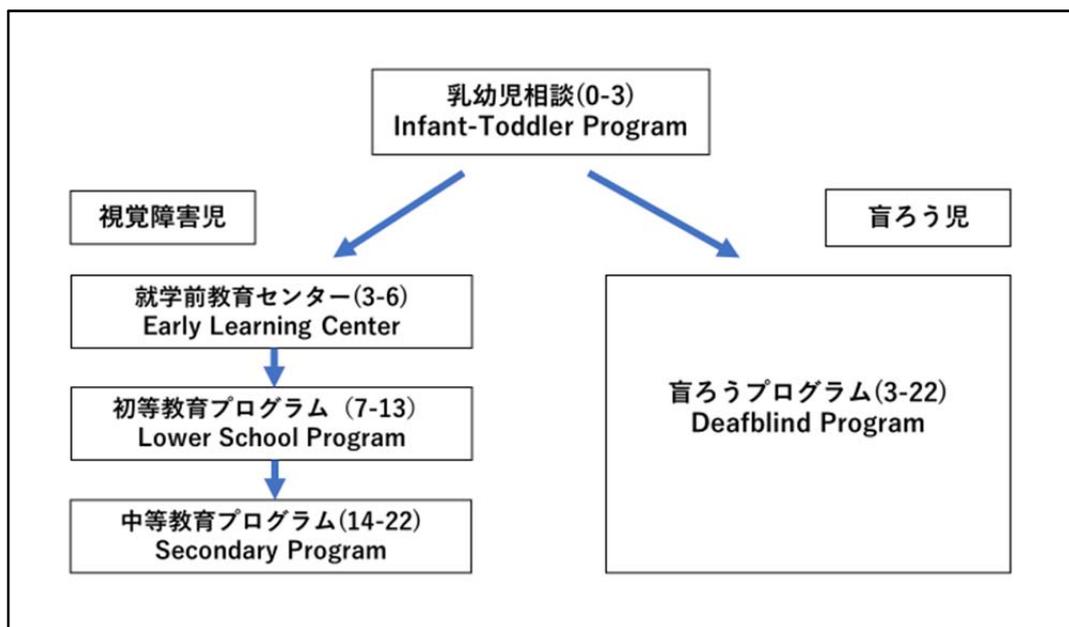
12カ国から参加していた同期生からは、文化やバックグラウンド、障害児、盲ろう児が置かれている状況が違うなかで、障害をもった子どもたちを支援していく理念について、議論し合う機会があり様々な刺激を受けました。

## 1 パーキンス盲学校の教育プログラム

乳幼児相談（0-3歳）では、視覚障害児、盲ろう児が家族と一緒に、週に一度相談教室に通ってきます。子どもたちは遊びの時間、保護者は教員と面談の時間となっており、月曜日、火曜日、木曜日にそれぞれ約10名の盲ろう児、視覚障害児とそのご家族が通って来ていました。3歳からは視覚障害プログラム、

盲ろうプログラムに分かれます。盲ろう児の教育においては、盲ろうプログラム独自の校舎があり、3歳から22歳までを対象に、早期教育から職業訓練まで教育が行われています。盲ろう児のニーズ、コミュニケーション方法は本当に様々です。

視覚障害プログラムと盲ろうプログラムの大きな違いは、使用しているコミュニケーションです。盲ろうプログラムでは、手話・サインを併用したトータルコミュニケーションでの教育が行われており、盲ろうプログラムの教員、寄宿舎職員は、子どもたちのコミュニケーションニーズに合わせて手話・サインを使用しています。視覚障害児は、就学教育センター(3-6歳)、初等教育プログラム(7-13歳)、中等教育プログラム(14-22歳)で学びます。



## 2 盲ろうプログラムの概要 (Deafblind Program)

### (1) 在籍盲ろう児

3歳から22歳までの47名の盲ろう児が在籍しています。マサチューセッツ州内外からの入学があり、通学生27名、寄宿舎生20名です。幼稚部から職業訓練クラスまであり、盲ろう児の年齢、障害の状況、コミュニケーションやニーズによって、1クラス4人から5人でクラス分けされています。

アメリカでは、出生から21歳までの盲ろう児が約10,000人います。そのうち90%の盲ろう児がその他の身体的、医療的、知的発達における障害・困難を持ち併せています。(National Center on DeafblindnessのHPより)パーキンズに在籍する盲ろう児も、障害の状況やニーズは様々で、医療的なケアを必要とする生徒も在籍しており、看護師が常駐しています。

盲ろう児への教育・支援を考えていくに当たっては、以下のような盲ろう児が抱える困難について考慮する必要があります。

- ・ 視覚と聴覚の両方に障害をもち併せることによる複雑で特有な困難
- ・ 身体的な障害
- ・ 医療的ケア
- ・ 知的発達
- ・ 行動面
- ・ 社会性

## (2) 盲ろう教育における理念

パーキンス盲学校の盲ろう児教育は、同校の教育理念“全ての子供たちは学ぶことができる(All children can learn)”のもと、盲ろう児の障害、ニーズに合わせたトータルコミュニケーションによって行われています。その教育を実践するために、人間が持つ五感の中で、視覚と聴覚両方に障害を持ち併せていることが、日々の生活、情報取得において如何に大きな影響を及ぼすのか、という盲ろう障害への認識・理解のもと、子どもたちの感覚器官を最大限に活用した授業が行われています。

## (3) 盲ろう児へのトータルコミュニケーション

盲ろう児のコミュニケーションは、手話、サイン、ジェスチャー、表情、音声、絵、写真、オブジェクト、墨字、点字といったあらゆる手段が用いられています。また、子どもたちの障害状況やニーズに合わせて、これらのコミュニケーションが併用されています。

(2)で述べた“子どもたちの感覚器官を最大限に活用する”ことは、子どもたちのコミュニケーションを考える際にも重要です。子どもたちの聴覚、視覚、身体的状況、その他抱えている困難を観察・把握することで、子どもたちがどのように情報を得て、自身のコミュニケーションを発展させていくかという点について、子どもたちの力を最大限に引き出す可能性が広がります。

## (4) 盲ろう児の“触る手”(touching)を尊重すること

見えない(見えづらい)・聞こえない(聞こえづらい)困難を抱えている盲ろう児が抱える困難の複雑性、情報障害を補うのが、“触る”ということです。同校の元教員で盲ろう児教育に長く携わって来られたバーバラ・マイル氏の“Respectful touching”に関する講義で、とても印象に残っていることがあります。それは、「盲ろう児にとって、彼らの手(触覚)は目であり、耳でもあり、様々な情報を得るためのとても大切な感覚です。見える子どもたちに何かを見せるために、子どもたちの顔をもって無理やり見させたりしないでしょよう？盲ろうの子どもの手をとって何か触らせようとするのは、見える子ども



たちの目に私たちの指を入れて、見てと言っていることと同じ。そんなことを決してしないでしょよう？」というお話です。以前、私は盲学校で

働いているとき、触ることに抵抗を感じていた生徒の手をとって、授業を行ったことがあります。バーバラさんの講義、また過去の自分の反省すべき経験から、視覚障害児、盲ろう児にとって、“触る”ことの重要性を改めて考え、気付かされる部分がありました。盲ろう児が情報を得る上で重要な役割を果たし、極めてデリケートな感覚を有する“触る手(touching)”は、盲ろう児の意思が尊重されなければなりません。尊重された子どもたちの“手”は、子どもたちの意志が詰まったものとなり、自発性を促し、子どもたちが自身の世界を広げて行く“扉”となると思います。

### 3 盲ろうプログラムにおける教育・授業

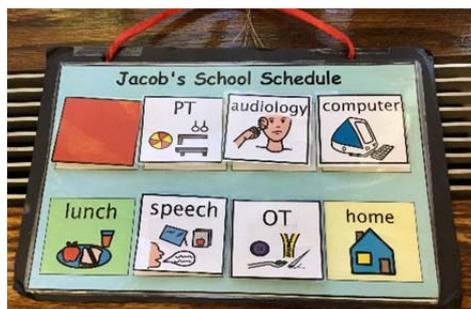
#### (1) 盲ろう児の興味・関心

同校での盲ろう児教育では、子どもたちが好きなこと、子どもたちの興味に重点が置かれています。保護者、その盲ろう児に関わる教員が出席する「個別指導計画会議」では、子どもたちの長所、好きなことを、どのように教育に取り入れていくか、ということも含めて議論しています。また、子どもたちとの関わりの中で、子どもたちの好きなことに思いっきり飛び込み、その世界を知り共有することが、子どもたちとのより良い関係を作り、様々な世界を共有できる信頼関係の構築に繋がります。

#### (2) 教育における三本柱

##### ●カレンダーシステム(Calendar system)

盲ろうプログラムでは、カレンダーシステムと呼ばれる手作りの個々のスケジュール表が使用されています。盲ろう児のコミュニケーション方法や、障害状況によって、絵や文字など視覚的なもの、オブジェクトや点字など触覚的なもの等、様々な形態のものがあります。盲ろう児にとって、次に何が起こるか「見通し」をもつことで、物事の流れを理解し、活動内容・スケジュールに対し、安心して取り組むことができます。また「見通し」を持ちづらいう盲ろう児が安心して物事に取り組めるということは、とても大切なことです。例えば、私たちも日々の生活の中で「今日は何が起こるか分からない。」「今やっていることをいつまでやればいいのか分からない。」といった状況に置かれたら、大きな不安感に襲われることでしょう。自分で情報を得ることが難しい盲ろう児が、物事の「始まり」と「終わり」を知り、見通しが持てる時間を過ごすことは、より意義ある活動に繋がります。



(写真左：緑「Time for」と赤「finished」のボックス。緑のボックスには注射器が入っている。

写真右：絵、文字の視覚的カレンダーシステム。)



(写真左：黒のボード、オブジェクトでのカレンダーシステム。上が午前、下が午後の授業。

写真右：絵、文字でのカレンダーシステム。左上「Time for」右上「O&M」、下に5つのグッドのカードがはってあり、その隣に「Computer」のカードがある。)

### ●自己選択・自己決定 (Making-choice)

クラスルームまたSTとのコミュニケーションの授業などで、先生が子どもたちに対して選択肢を提示し、彼ら自身が“選ぶ”という場面をよくみかけました。情報が限られている盲ろう児にとっても、自分の意思で何かを選択するということは、尊重されるべき自己決定権です。自己選択・自己決定の場をより多く設けることで、意思表示の場を増やし、コミュニケーションの発達を促す授業も多く見受けられました。日々の生活の中で、盲ろう児の“選択の権利”が尊重されることの必要性を感じました。

### ●相互作用からなるコミュニケーション (Turn-Taking)

1対1でのコミュニケーション、また朝のグループ活動等、様々な場面で使用されているのが、相互作用からなるコミュニケーション“Turn-Taking”です。

例えば1対1のコミュニケーションで、盲ろう児が私に「手を叩いてほしい（手を合わせて音を鳴らしてほしい）」という要求をしてきたとき、その要求に答えたあと、「次はあなたの番ね」と手をたたき、という「要求」と「受諾」を交互にやりとりします。集団活動では、次のような朝の会での取り組みがありました。当月のテーマが天気で、きりふき（雨）、ミニチュア扇風機（風）、ライト（晴れ）が入っている袋から、順番にオブジェクトを選ぶのですが、その過程で友達が選ぶのを待てない、友達が選んだ扇風機を触りたがるなど、子どもたちから様々な要求があります。こうしたグループ活動の中で、「自分が選ぶ番」「友達が選ぶのを待つ番」「自分が選んだ天気を友達に渡して共有する」といった、友達、他者とのやりとりの時間にそれぞれ意味をもたせます。このように、交代や順番による活動を取り入れることによって、子どもたちの発信、受信が一方的なものではなく、相互作用からなるものにしていきます。盲ろう児に関わる人がその盲ろう児を尊重するだけでなく、盲ろう児の発信を促し、盲ろう児自身が他者を尊重するという人間関係の構築における基盤となります。



### (3) 授業スケジュール

毎日の授業は、個々の学習ニーズによって組み立てられています。朝の会や音楽、調理などグループ学習の時間もあれば、OT、PT、算数、国語など個別の授業も多くあります。職業訓練クラスにおいては、キャンパス内外での学習、職業訓練実習において、個々の予定が組まれています。

	Cameron	Natalie	Salem	Shelby	Jacob
9:00	Snack/Sched	Snack/Hair	Snack/Sched	Snack/Play	Sched.
9:30	OT	Comp.	Aud./Speech	PT	ELA
10:00	ELA	PT	Math	Comp.	Math
10:30	Patterns	Gym	Comp.	Gym	Comp.
11:00	Circle	Circle	Circle	Circle	Circle
12:30	Choice	ELA	ELA	ELA	Choice
1:00	Day Bk.	OT	Comp.	T/Aud.	OT
1:30	Music	Music	Music	Music	Music
2:00	Cooking	Cooking	Cooking	Cooking	Cooking
2:30	Motor	Motor	Motor	Motor	Comp.

(写真：幼稚部の一日のスケジュール)

#### (4) 子どもたちのニーズに合わせた本 (Adapted Book)

盲ろう児のニーズに合った本を先生方が作成し、それを授業で使用します。たとえば弱視難聴児(4歳)の国語の授業では、物語を音声・手話で読みながら、物語に出てくるコップ、靴、リュック、ピーナッツバター、ブロックの実物を使用し、それらを触ったり見たり、匂いを嗅いだりしながら、トータルコミュニケーションを用いて、感覚器官を最大限に活用した授業が行われていました。この子どものニーズに合わせた本は、使用する色、テキスチャー、実物、歌など本の概観・ストーリーに工夫を加えながら、子どもたちが持つ感覚器官を活用して楽しめるものとなっています。中には、ストーリーブックという自身の実体験に基づいた本もあり、個々の盲ろう児にカスタマイズした本を通して、学びや経験を深めていました。



(写真左：本「Look What I Can do」、右写真：左の本のストーリーにでてくるオブジェクト)

#### (5) 専門家による支援

以下の専門教員・職員がおり、日々の授業スケジュールの中に、盲ろう児のニーズに応じた専門教員との授業が組み込まれています。

- ・ 言語聴覚士
- ・ 作業療法士
- ・ 理学療法士
- ・ 聴覚訓練士
- ・ 眼科医
- ・ 歩行訓練士
- ・ 適応体育教員
- ・ 行動分析士



(写真右：理学療法士の授業。盲ろう児が歩行器を使用して歩く練習を行っている。

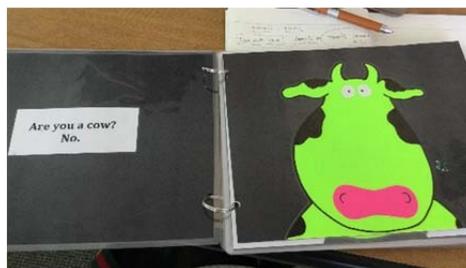
写真左：言語聴覚士の授業。盲ろう生徒が手話、彼女の声となるデバイスを

使用しながら、出来事を振り返っている。)

(6) 皮質性視覚障害、CVI (Cortical Visual Impairment) 盲ろう児への支援  
CVI とは脳神経の視覚情報の処理機能による視覚障害です。具体的には、下記に示した視覚的特徴があります。

- 1, 好みの色がある。(赤や黄色を好む場合が多い。)
- 2, 動きがある物を好む。
- 3, 提示物に対する反応に遅れがある。
- 4, ライトに集中する。
- 5, 複雑な視覚環境で見ことの困難さがある。
- 6, 好みの視野がある。
- 7, 近くの空間のみ視覚的注意を向ける。
- 8, 接近する物への瞬きの回数が少ない。
- 9, 見慣れない物を見ることが困難である。
- 10, 見ることと、見ているものへ触れることが必ずしも連動しない。

CVI 盲ろう児に対しては、上記の特徴を考慮した環境設定、教材の工夫がなされています。また Eyegaze という眼球の動きを分析し、子どもたちが見やすい場所や色など、視覚的特徴をデータ化してくれる視線検出システムを活用しています。Eyegaze で得られた子どもたちの見え方についての情報は、他の教員や家庭と共有され、授業で使用する教材の色や提示場所などに活用されています。



(写真左：机、背景が黒の環境設定、右：黒が背景の本、右ページの牛は蛍光黄色。)

#### 4 会議

盲ろうプログラムでは、以下の3つの会議が実施されています。会議によって出席者の違いはありますが、保護者、学部長、教育コーディネーター、クラス担任、寄宿舎職員、移行支援担当教員、(6)に記載した専門教員など、私が実際に以下の3つの会議に参加した際には、それぞれ約15名程度で会議が行われていました。

(1) 個別指導計画会議 (IEP ミーティング : Individualized Educational Planning Meeting)

本人も参加が可能で、基本的には年1回実施し、保護者の要望に応じて2回以上実施することもあります。

(2) 行動支援会議 (Behavioral Meeting)

行動面で課題があり、より特別な支援が必要な生徒のための会議です。担任からの要望に応じて行動分析士が授業観察などを行い、その生徒に関わる教員全員で話し合いを行います。

(3) 本人主体の支援計画会議 (Person Centered Planning Meeting)

本人のバックグラウンド、興味、長所、ニーズなどに注目し、夢や将来の目標達成に向けて、支援の方向性を導き出していくための会議です。

#### 5、補助器具センター (Assistive-device Center)

同校では、教室で使う椅子、机、カレンダーシステムのオブジェクト、教材などをオーダーメイドで作製しているセンターがあります。基本的には教員の要望に応じてデザイン・作製されますが、センターのスタッフが教室を訪問し、実際に子どもたちの様子を見て、どのようなものがよいか担当教員と話し合い、より子どもたちのニーズに合ったものを製作するといった取組をしています。



(写真：補助器具センターが作製したスタンディングディスク)

以下のグループに分かれて実施しました。

### ① 卒業後の生活・就労

参加者：17名（教育関係者、家族、支援関係者、当事者、施設関係者）

この分科会には、教育関係者6名、家族5名、支援関係者4名、当事者1名、施設関係者1名の合計17名が集まりました。それぞれ対象と考える盲ろう者の、年齢（成人、卒業間近、小学生）、重複する障害の有無や種類等は様々ですが、参加した目的は、盲ろう者が長い人生を安心して幸せに生きていくためには、今、何を考え、どう行動すればいいのだろう、ということと共に考えたいということ、子どもたちの将来の生活をイメージするために情報を得たい、ということでした。

まずは現状を知ることから、と、通訳介助者の派遣等を担当している方々から、成人盲ろう者の社会での自立の状況を話していただきました。数年前に実施された実態調査では、18歳～65歳の盲ろう者のうち、平日の日中「就労している」は2割強で、多くは「家庭内にいる」という結果が出ています。就労先や地域でつながる作業所も少なく、最近増えてきている大学等へ進学する方々も、その後の就労が難しく、作業所等も能力とマッチしないということで、解決策が見えづらいようです。職業としてはマッサージ業、特例子会社での事務仕事、盲ろう関係団体の職員等ですが、通勤には通訳介助が使えないため、自営以外では一人で通えるかどうかが課題となります。また、コミュニケーションの問題も壁となります。就労している方が少しずつ障害の状態が進んでくると、職業を失うことを心配して、職場に支援や配慮を求めづらい、ということもあるようです。

このような現状を聞いて空気がちょっと重くなってきましたが、「世の中の働き方はどんどん変化しており、会社に出勤せず在宅で仕事や会議を行うようになっていくとの見通しもあり、パソコンが使えるれば、このような時流に乗って能力を発揮することも可能になるかもしれない。それを見越した教育を」「会社に就職しなくても、SOHO（パソコンとネットワークを活用して、小さな事務所や自宅で仕事する業務形態）や内職等も在宅でできる仕事なので、この方面の開拓にも可能性はある」と少し展望が開けてくる話も出てきました。今はロールモデルとなる先天盲ろう者の数は少なく不安もありますが、世の中の流れの中から子どもたちを生かせるチャンスを敏感に察知して、先取りするつもりで教育を行わなければならない、と気持ちが引き締められました。

次に、重複する障害のある盲ろう者についての話となりました。最近では児童デイサービス等が充実して、手厚く温かい支援が受けられるようになりました。

成人後の施設も同様に受け入れは良くなってきています。盲ろうの方々がたくさん通う事業所にお子さんが通っている方からは、お仕事ができる事は幸せだと思おう一方、盲ろうの人一人一人の特性やニーズ、お世話するだけではなくまだまだ成長していったほしいという家族の願いに、十分対応していただけているか、という、そうとも言えない現状がある、とのお話がありました。学校と家庭とで頑張ることができるようになってきたことも、緩やかにできなくなっていくことに不安を感じている、ということもあるようです。盲ろうの方向けの生活訓練事業がほしい、という声もあります。このような話を受け、当事者からは、福祉を学んで、将来、日本版ヘレンケラーセンターが設立されたら、盲ろう者の生活を支える仕事がしたい、という発言がありました。盲ろう児の卒後の生活に向けて事業所を立ち上げた立場からは、支援者や家族の不安はあっても一歩踏み出さなければ何も始まらない、とみんなにハッパをかけていただきました。何もないよね、と言っているのではなく、卒後の豊かな暮らしに向けて、こんな風に働いていきたいという見通し、夢を持つこと。家族のがんばりと受け止める側の覚悟を持って、続けていくことが大切。また、学校でできていたことができなくなっているのではなく、「いつでも、どこでも、誰とでも」できるように定着してこそ「できる」と言えるのであって、そうなるように教育をしていかなければならない、と、卒後の生活に向けて行動していく必要性とともに、教育の視点についても活を入れていただいたところで、ちょうど時間となりました。

現時点では状況はかなり厳しいことがわかりましたが、先天性盲ろう児の教育も社会福祉も着実に進んでいます。大学進学を目指す人も今後増えてくることでしょう。また、重複する障害がある人も、教育機関で身につけたライフスキルを生かして社会参加し、豊かに人生を楽しめる時代になります。参加された皆様、今を嘆くばかりではなく現実をきちんと見据え、将来の夢を描き、今できることを見つけて一歩を踏み出していこう、という気持ちで終わることができましたでしょうか？ 広大な草原に踏み出すような不安もありますが、1年後のこの会では「こんな一歩を踏み出した」という報告ができるよう、がんばりましょう！

(文責：長尾公美子)

## ② コミュニケーションについて Aグループ (教職員・支援者等対象)

参加者：11名 (教員、友の会職員、学生、医師)

医療関係者、学校関係者、地域支援者が集まり、関わっていらっしゃるお子さんの様子、そのお子さんとの関わりの中で感じることや悩みについてお話を伺いました。どのようにコミュニケーションをとっていけばよいか、

触ること・触られることに抵抗をもつお子さんの場合、どのように関わって  
いけばよいかなどのお話がありました。子どもたちにとって心地よい関係、  
信頼関係を築くことの大切さを確認し合いました。そのために、行う活動内  
容を予告し、子どもたちが見通しをもって活動に取り組めるようなコミュニ  
ケーションについて話し合いをしました。

また子どもたちの好きなことや、子どもたちがどんなときに笑顔になるか  
というお話もお伺いし、そういった時間を増やしていけるような関わりが、  
子供たちのコミュニケーションの発展、より良い関係づくりに繋がっていく  
ことを確認しました。

(文責：事務局)

### ③ コミュニケーションについて Bグループ (保護者対象)

参加者：11名 (保護者)

はじめに、自己紹介を兼ねてお子さんの様子やこんなことができたらいいな、  
こんな力をつけてほしいといった保護者の方の思いを話していただきました。  
その中で、何人かの保護者から共通して出された問題意識「子どもからの発信  
をどのように促していくのか」を中心に協議しました。

ある保護者の方から、次のようなエピソードの紹介がありました。

---

小学部3年生(全盲、難聴)の子どもには、日頃からホームサインを使って  
いた。たとえば、子どものそばに来たときには、子どもの手をとって、手の平  
を自分(お母さん)の首にあて、来たことを知らせることをしていた。

何となく言っていることは分かっているなど行動から判断していたが、なか  
なか本人からの意思表示が出てこなかった。

ある日、子どもが大好きなトランポリンと一緒に跳んで楽しんでいたが、(お  
母さんは)疲れて跳ぶのをやめ、その場から離れた。すると、しばらくして、  
子どもが、手の平で首を触った。「お母さんと呼んだ」とわかったので、そば  
にいき、来たことを伝え、子どもは嬉しそうににっこり。そして、一緒に  
トランポリンを跳んだけれど、しばらくして、また疲れたので、バイバイして  
離れると、また子どもは手の平で首を触ったので、また、そばに行き、「わか  
った、来たよ」とそばに来たことを伝えた。こういったことがあって、自分(お  
母さん)を呼ぶときは、手の平で首を触るサインが確実になっていた。

---

この感動的なエピソードを共有し、毎日の生活の中で丁寧に関わっていくこ  
と、日々の生活の中で人と関わる喜びが感じられるような関わり、心揺さぶら  
れる経験をしていくことなどがコミュニケーションを育てる土壌になることを  
確認しました。また、子どもの僅かな動きを見逃さないようにし、たとえ子ど  
も自身が意図しないことであっても、意図的な働きかけをすることが発信に繋

がることなどを、体験を出し合いながら、共有しました。

(文責：事務局)

#### ④映画「もうろうをいきる」を観る

参加者：15名（家族、サポーター、作業所職員、教員、学生等）

映画「もうろうをいきる」は、今さらご紹介するまでもありませんが、西原孝至監督のもとに製作されたドキュメンタリー映画です。2017年に公開され、大きな反響を得て、第26回全国盲ろう者大会（2017年、岩手）でも上映されました。本分科会では、見る機会を逃してしまっていた方、もう一度見たい方、映画を知らなかった方などのために、上映会を行いました。

分科会には、盲ろう児のご家族、特別支援学校の教員など、さまざまな立場から15名の方々が参加しました。

映画製作にかかわった東京大学先端科学技術研究センター 大河内直之氏から、映画の簡単な紹介があり（上映時間91分、分科会の持ち時間90分という限られた時間だったため）、さっそく皆で映画を鑑賞しました。字幕付き、および音声ガイド付きバージョンでの上映でした。

映画では、宮崎、宮城、広島、新潟、東京などで暮らす盲ろう者の日常生活が、ありのままに映し出されていました。分科会の参加者は、映画に登場する盲ろう者の「ふつうの」姿に触れて感動したり笑顔がこぼれたり、西原監督が聞き出す盲ろう者の「思い」に考えさせられたりと、それぞれに何かを持ち帰ったようでした。

映画タイトル：『もうろうをいきる』

製作：株式会社シグロ

時間：91分

(文責：柴崎美穂)

### 先天性盲ろう児者の活動プログラム報告

今年の盲ろう児者の参加数は10名、兄弟姉妹3名、ご協力くださったスタッフ・ボランティアさんは20名でした。例年より大変暑く、小さな子どもの参加者が多かったです。

筑波大学附属久里浜特別支援学校の多大なバックアップを賜り、幼稚部教室を拠点にプールや遊具・玩具を自由に使用させていただきました。また、国立特別支援教育研究所のスヌーズレンやトランポリンルームもお借りして活動することができました。これらのご支援に対し、心より感謝申し上げます。

子どもたちはボランティアさんに見守られ、初めてのボランティアさんとの

人間関係を築きながら探索し、楽しく遊んでくれました。小さな子どもたちは日陰のビニールプールで、大きな人たちは海の見える屋外プールで思い切り水遊びをしたり、特大の風船や吊り下げ遊具や室内トランポリンで遊んだり、スライムや水風船のように触り心地の異なる触察素材、貝殻や海藻の乾いた状態と水中の状態を触ったり、エプロンと三角巾をつけて美味しいかき氷やスムージーを作ったりしました。

活動プログラムは、酷暑に細心の注意を払い、安全で楽しい活動をめざしましたが、子どもたちは、活発な行動と逞しい姿を見せ、存分に楽しんでくれたようです。

(文責：星野勉)

#### ●運営委員会・事務局より

第16回定期総会・研究協議会で実践報告、海外研修報告、ポスター発表をしてくださった方々、そしてご参加いただいた皆様、お忙しい中、ありがとうございました。今回も、ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々に多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

#### ●会費納入のお知らせ

・年会費(2,000円/年)の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたら、どうぞご容赦下さい。

(例)「2018未」：2018年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。ただし、過去に未納の年度がある場合は、過去の年度分として領収させていただく場合がありますので、ご了承ください。

◇振込・振替先(みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい)

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

- 連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。
- 2019年度の夏の盲ろう関係の大会・集い等のご案内
  - ・2019 ふうわ夏の集い in とっとり ～ひろがれ笑顔・ともだちの輪～  
7月20日（土）13：00 ～ 21日（日）12：30  
米子コンベンションセンター（1日目）  
鳥取県立総合療育センター（2日目）にて開催
  - ・第28回全国盲ろう者大会  
8月23日（金）～8月25日（日）  
名古屋国際会議場にて開催

### ☆☆お知らせ☆☆

- ◆ 全国盲ろう教育研究会 第17回定期総会・研究協議会  
期日：2019年8月3日（土）・4日（日）  
場所：国立特別支援教育総合研究所  
（神奈川県横須賀市野比5-1-1）  
内容（予定）：実践報告、講演、ポスター発表、分科会
- 研究協議会では、皆様を持ち寄ってくださった全国各地の実践報告・交流を大切にしています。是非ともポスター発表をご検討ください。